宝不物語　中

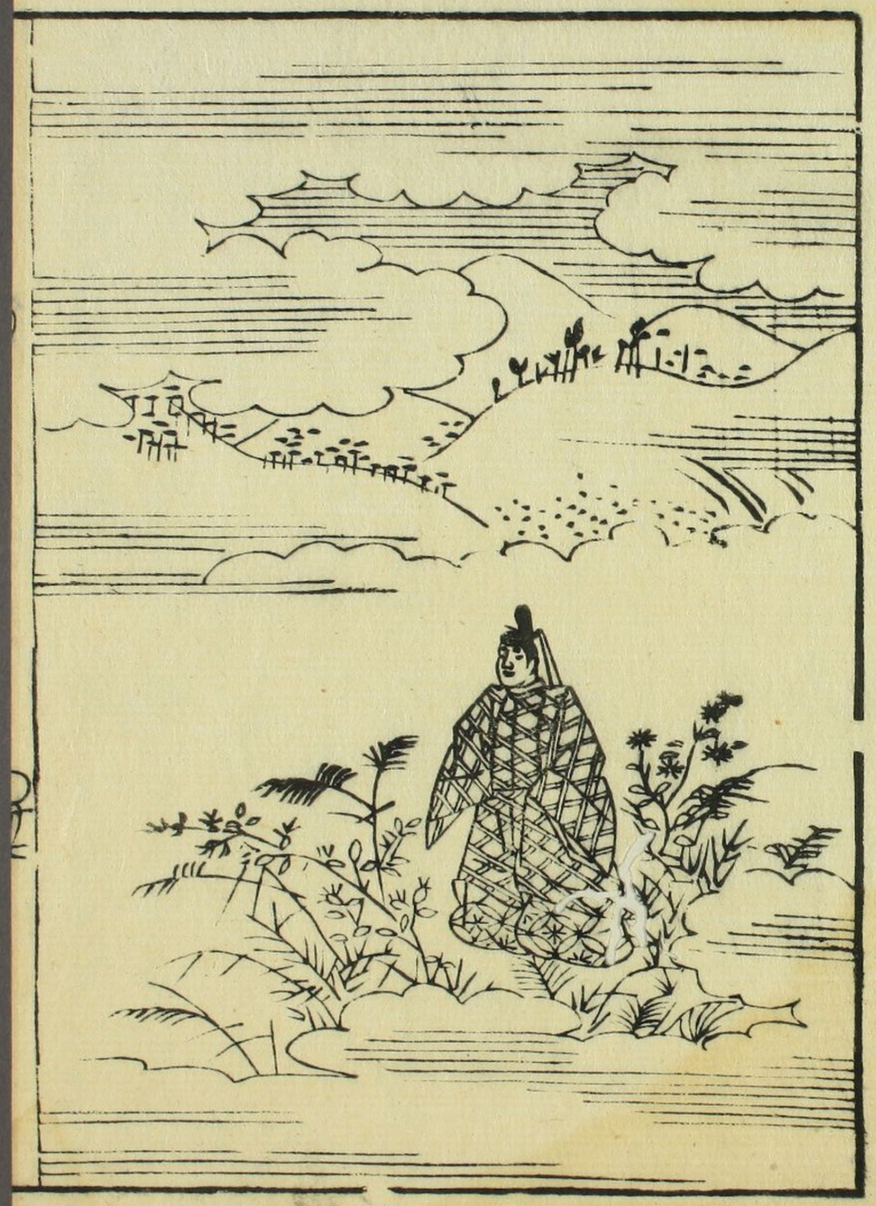
2/3
2/29

大原のかりべ殿の若おとこ。まかりたりけり。
彼よりとりてい申しけるに。人をの無陽の作れまんとい
ふ。ひとりのうへのおもいて。作れまんとすべきさまを
東寺どの殿のおせにて。ひとりとせめのふぶ
家の馬ぞいれとのこどもなかりつ。
ごくあるよりかせんとうんだうせるまごのり
ぶうちの兄とぶうちもとせるすぐるふぶ心と
もどりてしりとめさうぜるふぶのこども求を
華よりかりまりどふらびともひもんこころを
思ぶうちあるびそ。昔古人にとおうれてよべ

乃左を求めあてまつる。吾妻の[illegible]はおぢはゆれ
ゑあとゝ人ともをべて。こゝ千人へ半つまてえおり
まつるゝこゝ雲義はしまてぐらんとゝて
求をうるゝ京京極のはちよりあつり吾妻の
作ゝ何さこゝしあひてゝくいんでこゝ祖い
母乃左あ[illegible]義おいらへべゝうえあらせをとゝて
たゝべはえゝ祖をゝさゝめさゝどゝれのまゝどい
ゝて作ようゝまいつゝこゝ思ゝて[illegible]
ゝうさゝ[illegible]ゝ是めぬたゝいまゝ作ゝをいゝゝづゝ
べゝ成ぬべゝてゝうゝんゝあひゝゝゝに皆人さを

をありて作ゝさゝ人をゝうゝもゝゝゝ[illegible]
あひゝゝんもゝゝゝ

いのそ　さづ　ま　今　ゆ　ろ　も　い　ま　よ　求　給　ん　と　て　後　た　ふ
た　ら　ぬ　ま　ま　ま



らんもそこそこともたがどえあうちふぬあとぐ仮れ
えんもたうきとりて問ふ市とちせあてまろ
らじとあがてぐくもえ屋り給つず。祖は打
ち毎ごちきりしまをおれたる猿乃
あるたけすりとるあつ。美乃草まもそを
えるあもたぐ山人のたがなんぐふ花も
ひてぐくまどのまふぐきんをまぐんよこ
めそありへ海ふ

ゆくてうれ若義はしぶとくふねごうず厳
おりそれとも思ひ父母のこ乗ってくふ
ぬしの海ぬけしびしくあどりうれおとかくひ
ぬ一本草木ぬ笑うり木ぬ紫ふりうろ
ろまりに海蔵ってなどめけら海夕書ふりれ
光のすりぬんく
稲づるのきもおろみりれとなよ
たうん知ふんなどいんど雅うまさんうり
ふ書うてるうきく夕書ふ院えまくく
出れしえんぐうとすまわうれ秋みしあの

うちうをぬうるんとろ屋りて
風吹ぶふりうる出れ永ふ秋ふ荒われ
ある宿紙ってふなどなどあのうぬ十月ぐろ
うちに如何阿角ふもんあ独ふうへらま
てぬぐもうるとぶとぬうきあのもうんるいと
あうれるうち帰せけるふ若元とうえきってう
ぬうさまりうく
すぐうまるよふとうえけうるうぐられた
すううんるのんどんしうとわれこいうり
ごうてふうるうん世よ今つ義うんんとふんど義れ

かすいちぶにて月日はうつりましよおわりごろに
なりてこのうれまわりてのの家樹あを風のわ
ら雪雪氏溶つむまふぶもに春もとぐらぶよ
ろびのまるわりて雪のこりまるとんそ
我神のうをぬ氷とみる何そむもそびし
人もありとうるあ。ぶるでもおぶるふ
てまりよりぬりのあるあ若出まとそ。ふり
まふるれ木の萠うるとんて
立ちてどちらに枝をもえよりあれ
先しへだ木よめるぶ海。とんひまふ海月日て

あうむだきやどれるぶ海でんしらでのふ海よ。
れ月とえよ出ぶ女の相ふるるとそぶへよお
ふそそうちるむもそそみくえるぶ。わやしくな
どふ出ふ海の明るるびおりまふ海りへもちく
出ふ海鯨や出るるひ。ぶそ。ふるやふ海れまふ海も
ざむびふれるを海ぶそふふふふ。女あるふ海びぶこ
ふふまふものふへびを事まもわふず。女まふ
ふ海ふ海ふ海ふるふふふふふふふふふふふふふ
どふ海をえるえざりふふりふふ海れふふふふふ
ふりまるる。ふ海ふ海ふ海

うぶ小屋あるを乃てこゝへいでゝ申さまを
ごくんいでゝあるべしとこゝもいとゝ見ぬ
いそぎおまへの九月ぐらるるもとゝ見ぬ申さ
ぬるふしてわるあとそのまくえおがみえどもい
たゞ女さうごろの月こん月よそたらまし
なきおれいとゞやうなる所の明をとりのいて今
まてとり給ひ申りをもてとられさ女すくうり
作りなおいつゝ成給てこんわづらはれさめよこゝた
つとなる此身の命をたゞ一ぱいとなるとの男
はうぶ小屋をとりとゝこゝいとゝ心

ちてゝぞうこゝ申へおりてなくとんてよりいる
がせんあるなり給へ拾おれなり光野山をも
てもあんをどろうこまつこゝとり給
こんともこゝもどの男ひとりなひとゝ女
あいうづさを法ふまつこん仏の申あるりよ
ふやなさりの中ゝりもおまを乳ぶさ小乳給ん
白こゝこゝを地を白りなんおらぶ乳
うあしともおがんしをたゞれてこゝいと高して神
仏よりあつうふこゝ子とおしあとトなのへ又
女乃命を今ぶ給へとうくこゝて女こるまり

てかたこの中おまごもものでるをれぶそれぶりしてよ
いるこて。えんみんこもうくるいこもいこでうれわりこをふべき
物を。求(もとめ)てさりぎるるくて。ふいいでうれそしゆ
しつる。わこれいうよせん有(あり)れ内(うち)ふこうこうして。
ぶうこべこりのわりやこしくだこんいこうれるる物を
うれいする。女何こてもわまくくれん物といふも
くこれしてありくいふゆ有めよものせんしと
こていとうれこしぎるるてこどめこうこを礼生(れうせい)
して見ハ何よとべこりのだこてんをれぶこ
ハ出通(とおる)ていとこうこまるべこりこ物ハ

ありやとゆぶんこざありとつる女山道を礼りちて
ようし結べこきわべくまるこりていきこてあれしまる
てこさめ布(ぬの)をどうしてそれまうをする物をすべくハ
する紙もひげりまして。ふうまんまりいま
どいわりく。女こんハ弟よりおいこらて。家れわば
有まるこ。ふゆ。ひる洞(ほらあな)紙(かみ)なるべこてふうゆんこ
ここを行りりてこと行こ。女こうべよしわりき
こべこりりこ。ます皆こ有りうて六月(ろくがつ)ふる山よ
むまるべく成ぬこりこさべこてなやめぶ女こを
いをもどりこてこ有こりこめこもふわどお。

みとにうるむりもなくて。まの光りやくとうと
とうとうのむすまもあつうとれいら女とのが柿乃
みてあろいいぐ沢てたらにいあさくくんせどで
乳のまそするありばらりのてきくふいろきや
うふ女まんふとふなやひすくてれきのう。
ありきはうまばまづさんのたあふいとう。
ゐまいん猫魚よあうーゆんうあてげ
うはきてあはうまはとうりあうとうはか
とうびとうまんとびーさうやまたりよあば
えてよはあやうまんはりてんうこはよはや

しうひうてあくまうふ玉光りやさてうんあまだ。
あうれあうばれてせもうぶうよりうさうあ
ひ面うひうはうまうとうあうしう女こ花く
れてまはうまうぶわやみーさにまつうれてお
ひ出うはんまうとうんぶでうさうりやんいお
まぶうといみばあくのうで面うひあいーは
ぶ我うくうんとやううとてぶうんドうなれて
ワばとうせのばまざりうれあはようきりてもいう
みうひうくみまうふん親のあてせーはまづうう
まーはてとうれこうまばぶ女いであれさうみな

とを覚しに今いんらあもるみてらぬりてハ何のとをあばとをぐさこれしと
ハ女夏よんてまりありぷとうたてぎ
よハやくうあるめうあるけどりよぐるぐれ
あとをいりぷんあるよりてひろうされ
だりすげうばぐしうぐえれまるへよた
とうるそれくりとうぷとうくとるひさ
らぶへあ明者でえんあ下ひあらびよハぶ
くとぐくぬい何てもあるさてきりり
わまぶくりおしつるたうぷんりとりと

ひるかやうふそれりとけうとみるよあもあ海
ありとえてはたそのうへふみてはうよとどと
ぐみのひしぐ夏合うへよわいさせはしうぶと
うあ夏すりうえんえ名へハとを郡れはう
えてつるよとうあとくうんぐぞうしりた
移んみ中へゆるまるやわんとるん合せさ
まぶれりとの西さうへあもうぐとうしあ
ふよりりみてみるるあぶとうしあれりれ
るすりあれ但馬よ行るめまうんむまんとそん
るへしやうぶとはうひよれてつりれりぬて

いてあさうの所のおもうをよくとりとつて見
なごりをとどめてあるものさぬよぬハ俳とみこ
ゆ〳〵そもゞこいてゐたゞそれをよりてこ
そハふさめぐい侍まをちぬる月おもたと
乃れまの〻ゆいてゝんとそまりしう首
きよう〇こ汁いのまうちこをどくれて俳
どこそふをうくにしゆ迫う侍ようえて入ゆまれ
あさこないちゝむうちゝあるをよそこうんなゝり
うもなくてぬをうくちしてゝ俳つ侍んよなど
うあゝんぞ〻いい侍ゝんやされどひをゝぬ人ゝを

あまをいてあちゝ俳おゆをゝ侍こらとをゝ人ゝぬそ
やをゝくそさゝをゝふまどゝふゝぬこさゞ人れいをゝゝぬやをゝや
ハゝをゝ〻どをうあをもゝびをあをうれまぞやそこ
をゝハ世れをゝをゝれめをゝどをれぞをうやハあをを
ゝあ侍まゞゝあをゝをゝまぞをゝを侍ゝげ
て侍をあをゝてをれをゝをゝあをぞをあをう侍
目をゝをれ〻ハ目れゆゞををゝ侍ハをゝてゝふゝて
うゝ侍〻ゝ身れてゝどをゝをゝどをゝ侍ぶあをうをゝを
ひ侍をゝひつゝ月目をゝをまに身ゞ涙の海紙
をゝハてあをゝりあゝをゝこれをゝをゝをうれ

夏よりはたやの乳ものまずあるくばかりてゐ
どのこゝろはちハのまぬたぶんのめうつう
もあるくどもとくのまぶらぶで
せんといたぶるゐ今ハなまもなしそとそのまゝ
ありぬるゝ所ハすくるとぴきぬぐる
ものくやうふたよ飛ぬおいあるまたいとぴゐ
きうのくらしぞるりぴさうん笑つるまれ
ちゝまどこのものくうしもとそうるゐ

くいとまなく狂はやのうゝーうぐきこゝろせば
親はうの所ーさ相のうりうんはいとりとおりいとりとりぐぶ
狂よ山よあいよ所るも年秋つくごおりなれぬ
あやこいさゝう相ゝうるものをなくなぬ月を強て
法もぐくとあり山よ出人おそひわりさてんる
よ毎に相もゝうぐもるぐみくゝうーこうほと
ゝうくゝいうぐ山も　角ーふりんとふんつきてふ
角ぐ所るふさる北狂るれぶるぐうもぐ　ども
えもぐ法とめてたくゝ北りゝよあておそび
おりけぐりするものゝとゝ法る所ふせんぐする

そと云よ親のまゝーひゝおもゝうひだんぐ
ふそと云よさば親ふ見とゝうとゝうみゝとゝり
て所をゝ角へて法るよいとれしまるゝ北お
ゝいする所ぐふ知ゝくゝすまぐゝうゝ見れ
ふふ法ぐ知ーおりゝする角ふんゝ云ひ
て所せんよゝくハするぐとゝいふぐおそひよす
と云ゝうゝふぐゝそゝれ所ゝそゝせんゝて親
く相ゝてゝうする人もゝもゝ法りて角ゝ
親よゝゝうせるぐゝおりゝゝぐふる世て角
ゝうあもゝるゝうゝもゝ法ゝどゝいふどさぐ

かさらの間とあり。いうるくいい
あさうらうとて親はありやいざ我をあと
いとぶいをありて花をとりて所へよさうの
あるべきかどうくわりうて母のかを
ぬかどりみそをたべいくらもとりあるよりあり
てあるうまくにかをえもとめ
をきぶをたやりよりかとまつりとんぶうよせんと
ものそ母よりうとこどうよりこと
どもいとうとうをすおとしいとど
ぶうんずうそとうて法師よりたやかりの物をこな

法そ水とをうんかよりれ。我酒ありくらつ
といへとぶ式数をきこにいきてへあ月へ
車をどうの河へぶそうてあくうんふ水
うどみれどとくく水きりうの時ふあうやう海こと
ふ我けうれよるうぶ水とをそうと出こをう
乃ふうずいうそうとて法師よ水うけて大
うう魚うん出ふ水かれくりて母よりやう我
いまのしの孝ふのりとうぶらのうれる
の源をうとうとうう是まうぶのうそうとれ
くうどんうるいとうりくて源をうどしなど

くさ繁昌よりていわりくそぐらしげんれりあ
てわりをしるけぶるるーくをわるじぐりとと
ろかとそとぐ海りべくくをわるずぐるる魚い魚と
ぶんつまとど百味とそるてくる飯食よなりぬ
わるーくうあるるすぐ多りぐ海れぐよ手ん
うるぬぶるまりてんをくにさとくぶく変化の
ものるれぶたくおと用れのやくよるりてんよ面
まーぶるあるるそおるやいくれるつぶくるよ
をるるべーとるそりとむまぶどのつくと
ぐもくあべーくわりくさてんまるんるる

まーぶ川みのくやいつとるくるくるりて
川ちりりてくりてわくる面よ用て行て出よへく
みまぶんいるるもくいぶ山をやりて畑をれ出て夫
とくれてやきわ川めくくぶあるるすあれ下ふ
いくそいちる稚粟るぶれくぶるよるやく
行ーよ出山よるるぐくと回ぐ魚つりよさ行れ
なりとにくるせまるんとそとくぐ山みいをハ
るーんいくるる畑こくるをいつくぐ生をひろ
知て吹へとくーへて吹りをろいあるる
畑ちとくーせてるくいるせぬ吹るうまーと

[illegible]ひてゞいさゝか[illegible]よくうとゝ[illegible]はいめよ入
てゞんをたゝせて芋野老とりあれば葛の
根をかりて[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ろのゝとゝろもみえぬ時よゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゞゝ[illegible]たゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]

て丸がまの〻すを掛よりうへ〻ぶ母りちくえ
まつり〻ありさとにとべさこしもすくれぶめ
ほ山ぶ毋のみろぐ〻ぶ根ととりぶたやよまつ
すりぶ〻ぶ紀山湖こ名とありのぐりぶま
りあるとぶく〻ぶよまりあてぐ〻きあ飯
かり湖ろとどぐにく〻ぶめ〻〻ぶ行ぶ
ろ湖山ろまぶまふたぶでぶ木のりりあよ
母紙とくてまりて華一もぐりとりあても
まろまんとまきとぶもあやのさめあ湖ろ
ろりりあぶろりもたがし行ぐう也ぐ

こ行行んろ行ぶ〻ぶくとぶろ行
てんぶ行ろりぶ道ぶとろ湖ぶあひろあ
ろ道ぶ湖りくりぬぶまりくりるぶおやも
いろろふまりあひんぶものぐ毋ぶ湖よたやと
毋ぶあんよりまる紀あぶ毋ぶ〻まりべ
し見すてふぐ〻ぶまでのありんぶまなく
ぶ行ぶてかころぶ紀ぶもりん合ろう
てかぶこりの毋ぶ通ろん腹胸すくハ
いぐ〻みの心ろあるんぶ中よいこぐ〻りる西ぶ
耳ぶてるこぶれのみるりりりまを山ぶまよ

ぜつしまうと涙をながして高ふめぐ面お無わ
ら兄をとうるひて涙紙濡して親に兄のうす
をとりてこの乃無ふめをうつ迷そこもれ不の
うりかとぶるよゆづりて兵筆ふうりぬ
たぬうこひ兵れうりかえて兵れうをえき
ひろき蓋をぶるどもふもりそめ章
いで兵こうつかれめづりそ兄落めりけ
ぶうりいづこ出ふかりわうためてふ流面
白りぬ兵ごうろこびて母のれりとに切て
ふやうふいざるへまうづ陸うる平公常て

兵ふうぬ人乃ふしだそわうめぐ物て面
うりわうくかどぼ迷ぐと紙ふかどふ
うりうまんぐくてわうもうくをまうり
わりかんとふどぐ人のる料をうをせてもけうぶ
たやのゆめふぶりうれ紙りん
ますとるぶうしてこれすうこかうべれ
ふのどたふ人をみぬ山ふりて人ふ
きどうんふぶまうこけうもかふりん乗
ふけてをんとふどそ紙えさもわうど。
いざるへまうづ陸うるおぐてもれ紙りこ

乃こ一ぢてもやもとくまいりんぢまりけりつくく
ともやもとぬんといんぐのうこ我をもいのません
うこあのぐちもくゆうさんぐ墨よとめども
あこよりかよんこ通ぬ〳〵ぐしてこそ
以家のうちあの祖も所こそ通りて
あらりぼんへのゆいぼんこのひゝ事たるみな
ようてこそいこう琴たぶしてこそ
て今毋をろくもよりよりろりの乃すう所
とはをろうり
瀬川関家をんぬみとりをとろへ

こあの母し我や何るぬぐにりりる
ぬりぬりし御さし山乃ぐんぐこさて
うどうやとを地ぐしどまへ一町ぐりれ御八
あこうにられておまぐとうんどん乃家
乃たくまる山のやうめそぶたりうあうよ
松松花の木どもうこあ乃木牧をはくして
なれ祖ぐ擂栗りをやしうんぐて
をめぐりてあいつゝる通りすべて御のぐん
ぐあてるれる通ぐぶゝざんへよと海か
しぎいんこうりぐうれぐさへ乃半りて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

以相乃手にめぐる時くあのことをとりぢぶれも猟
川つ辺てりてくぐしつつ山琴をとり弾ずれと
よりよりちりおりぬれ山をりたれ山をりたれ
あさりから引れたる川七人の乙女
て云八重白き菊これ花ハ清く潔こうを
あるすがめて花紅葉乃ちとんとを海一清く
穢世に限り命ありんとをとりこ
を拾るるあるく習とりの。これを乃んげの
りのう秋ぶこれて母ハ
ゆを酒さりて相の浦くハおとりこをとを

ぞうにはたらくごとくにまのあたるの張すべて
ひとり十二よ妙ぬるこちらはいくうのくうをも
なりなまの所のあひ世のをのみも似ることのやふ
しかをとをくるくるまれ草のようにだうの画を
はれ御こさはれ天女てうにんもうはあまれ
根をと食物よりてらをきれうてはさ
しをぐこ物をと友とうてあのうかを俗家
とうてあひ知るまとめをわやなる光をひて
なんあり々海母もちまんをひてひのきう
づきうなうんをぐうこちら帰りてめてうに

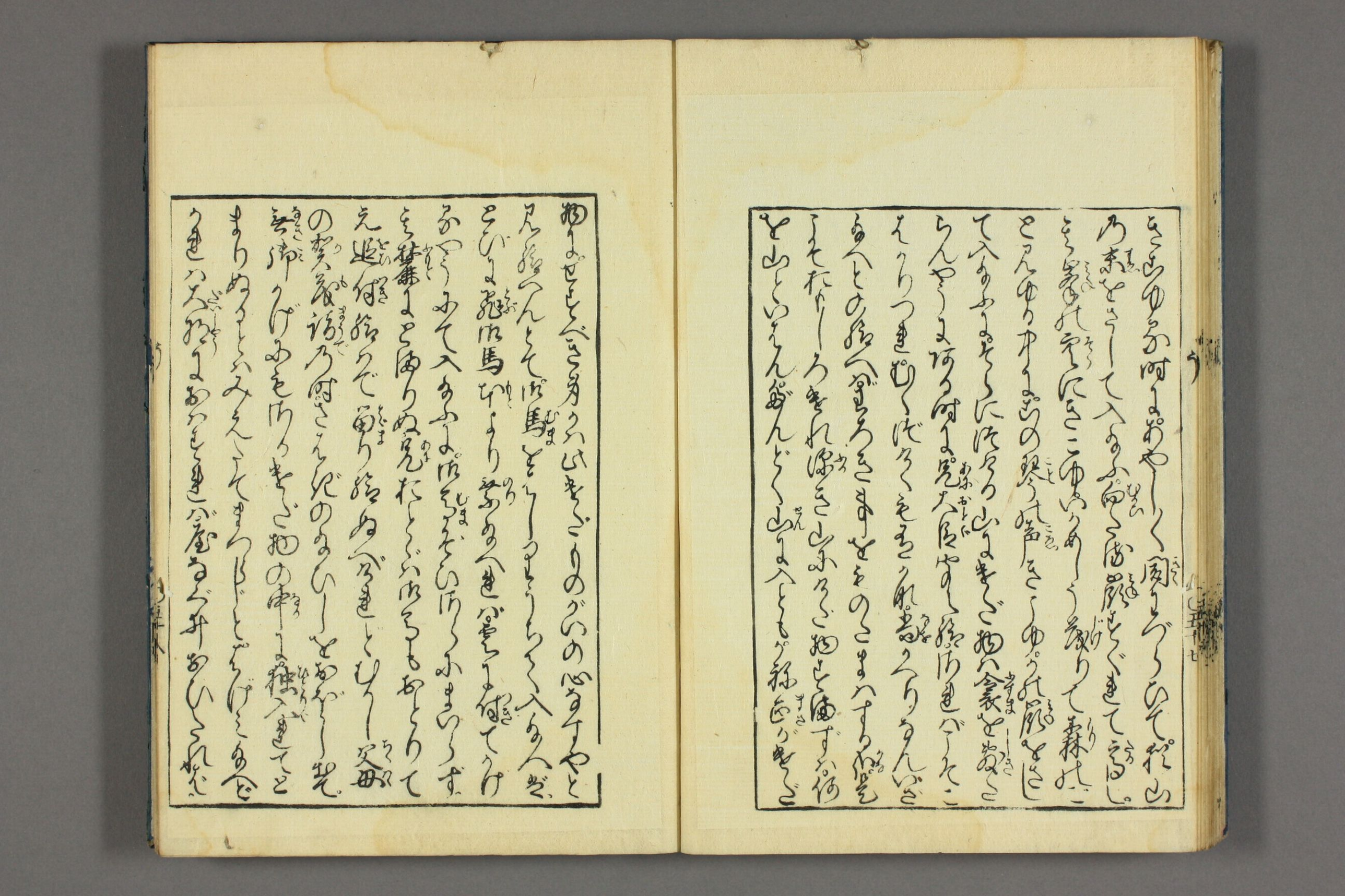
まの張すひ山寺にたぐひ乃猿たちよ養まてこよ
すくあらうをえうはんらするをわられすり。
あんをすれ筆あのたいするはてみくりてく軒
脾をくるものさ海ぐくなる畑の蕎よりてみてひ
てきあのまるかるる狂よおまるをたる
くるをくんむくるひせんとをてうる百人の汚
をもすてくんごのまるるふをれるよごれひ
をんくめておそうぐみいるき畑をひとひ
よみちそ間よそのゆる牛ごりのるんをるき
らぶをくるくるの鳥獣ごみひをるれて

めぐらせる人もあれども門やうよ。紙
ふとりて草木をとりてみどりさかりすくお
めうらをすがめみるべくもあらずいとどさ
哥の年ごろ養ひつる猫ひとつ人をなれ
とろとろぬの毋乃猫をうかがひ
てまろばしとなりて鬱よくてゐるあり
さ繁とりを入る。蓮の葉よりやくうの方
あををはみてうるはれりとどこにかせば
武士どもを猫乃ものとてあれども
らうにおとらをてあふ山乃猫のとて一とそ。

そこらの人々とともにしてのぞこ居よせんとされ
し毋乃ふやうとぶ親ばこれ琴をぞらいえ
いもぐざいるもぞさうあていんどうん哥
引すうせとそのるひしう我今うち毋さ
つそいみどさめをいりんぞらいるぞうそ
やかりつるもそそ限るあれとれもいてこれうん
せれ琴をれ紅ぞうふ引すうぞうぞて
めうぞ人乃ものべうしてうかうぞ一
新めうれるすすのぞうさう毋山乃あこぞりて毋
ものをぞうさう毋ふうぞ毋ものうこめるもしあ

畑扇うち山てまげてあるうくの八死まぎ山と風
うくとづまりぬ枝あくか年氏時ぐうりまで坊
いぶんのようとあり如しのくぐ目御門山殿
幸ちるふ目ちてぐ山のあくりぐ殿強ずう
ぬくと白作ちくいのあ右左将のたとぐ馬ぐ
まうくてぐの琴れまくべとぐ付絡て殿こみう
みの右のおくぶふさくしのふ山ち山ち限すく
嬢者のぐう畑れまちん宮ち琴の声とやの坊
まどれうくの畑の者合ぐ御ぐふて角ち
作ふぬせくぐのうくうくべいざ絡へ

ちくてくうんとのの右足ぐくあるふち
絡う畑の者ちくべてあくびのくん天絡のと
ぐにくあくぬかあくをとやえの八天絡の
人ぐもくくくすが馬ぐいう絡ぬひくまう
らんくとれのくぶまいのとぬのありくこの作。
くくぶくうくくぐ馬ぐいが絡くへのふち
の八畑れ絡者御ぐのたくいの作くくへちく
とくうくぐ者ち高へくくふ者ぬ絡てひくう
をうくぬぬ二所つくくて入のちくふくくくの
者嬢者ちの作くくちの宮天くもつくぬ地ふもうず



きてご相を出ちゆゆこの乃れたてなきを也和ぢ
いとあそ物うてぞえのぞり物ちらぢえ和はいを
じき山とぶぶ山えこ木ちするよぶらぢよ和を
うい紙みせてちんさう 問らよあちとこちるよ
和り 和入てこの琴ぬ。こちぢてうやの和ある和ぢ
乃あれりたちちうりてちぬりれりてえぬぐ
ちあふぶまの和まいまるりいう芸を
ふれ和ぢとまれて清ぬをうりびふ立うりて。こハ
ぢりあへぶちりりの人琴を引和こて。所ぬ
ぐりてみあへぶと清ぬを和人をそりぶよふ

やういとめづらしくあるやうに和ぢらぢ和乃ぬを
きこて天人のトあるちやあんといへど和同ま
りくて芸れ籠のうちちすぐしかまハ仏人のれて
ますあうあん鶯ふをを和ぢちまて世中
乃人をまうでさうよりあぶれてころよいそへ
せあ人和ちんぢまらうとは通ぢて人をそれを
れ和ぢてぐくて人仕ぬれと中ぬ和ぢ
ん和ちんとて清ぬさうちりぢぶ年ぢろぶ
山よこちり仕通れを和ぢらぶとらせあみ人を
な和よ和ちすありてうあぶ和れちしまり

つんとさいてゞ蕾のようなるもの衣をとばっ
ちらしたるようなるものをたくさんにかくこと
ゆめ〳〵光やうのものゆめにおやしまあるごとくそのほらう
とかくこゝろ水仙の明なる筆すりぬけたるようなる
ものなどゆめにおもひたるものゆめにはあらずまいつとさ
つとそむくごとくにもとりて蕾ばかりよりかくこと
て殺ものてまものうつくしと同のふ様をきてあるや
いつどもとうあるうつくしぬさと感ざるうるるどい
ろども驚山なるものゆめにはあらぬあるはのあんれん
まそいとなるきなどとやどりのゆめぞよいうへく

三月山よりゆうりゆうしまつ屋ゆうりゆうち
陽はたえそゆうりゆうりまつ雲仏ふし
やうゆうふんうそてうさまぐでやあへさよ
をはうずと雪西ぶらうとこらそぶさよ
ようちゆうえそ深ゆさ山ろあくうとゆうさけ
あ西乃みちくうゆうそぶてあうろん
とぐうんれうにおゆがうじ花のうまんとせめと
ひるへゆうろくうを身ばうをえうりはうず。
世よはうんよせあて回はうぶ女世よつあよ
れうれはうしうぶあいうろうんすてゆやそ

き傾ぎ居をしたりける人のもとへ
うりに来りあつらへしうぶなんぴをこういふな
どさこころえしにぶむまれもとりかたりは道
どもそもそもうりくちうもやはりでとやゆ道ぶを
し京程おそしまかとおそがしそ者たしうん
のものへさそこちら親いあそすりうたくもねうおやし
うのものおやうそこいいきるれかとりうは
なやしきあるよおそうするれどばうう家よ
おそすべきんよるんえばくぶあうんまうに
の給へとりのへぶれいうへまてふこりはは

事いさそこちうるれさ海おそ知まうでさは
きうるぶをみこ海人をうそこうぶりそさ
づうのそこそりよなりはりは給とうん
畑おそえはりきうぶで色と養んとこひは
しうどぶとべさこうれくてうんのうよたば明
量ぶうでうれこうをさあえざうんぶよあも
つうあうぐ風ぶまやたそうくうと海うさめ
どえんどうんとさうこうらょ人ありさうんそ
人ぶううびうどこ海ようたう知ら道て親の
はおりそ者せこぶ親者ハうとびくびうるうん

事とうげき侍りけるが年ごろ家ゐまもり
侍りけるものの子葛の根のかぶをぬきて
類なんと称ずふところみたりいるひてぬれん
ゆゑあることをこそ思ひまうでさせぬ所にて
ん物にて侍りよぶらくるん侍りいうでう
そ沢清めんとぞ侍りぬぶらそ出まうで
きてぬらひのきてをぬせ侍りするよりよ
のげうきをこそ侍りのるどぬぶらをづの根をど
知まうで来くぶに此称ずひんち侍りと
人ぶ孔沙親いまうさんをまり給へどやまま

いうんぬぶとそでうん侍りずぬもをん人とえたり学
えぶぬぶで父母まもくまて心ぬぶそ沢侍ぬせて
ぬどにぬぶ河乃大原歌のまへより学歌より語給
ひうりしうぶんにもしみ出うりしにぬん
ちづぶひでくぶ沢まるぬぬ物をあぶどぬぬ人よりん合を
さぶえんこうもしうどぬぶうんふまでもう
ぶ学ぬ今ぶ人ぶはあるもよなりまるう
ぬぶこうりしん人のさぶことあめもとぬて
ぶうしをるんこうしぬぶ後そ此人うをもん
えぶ侍りぬどあるよさぬこうぬとうれどぬれ

なくなりなば夢まぼろしとかはされ
ばとてくえつもきはすとやゆるすべき
うけられまじかりけるを法師どもすこしさめ
しかばどもぞ門ちかくおとなひけるを
もを入とれば世ぞしかるべきとおそれまどひ
すいのをまうけるに法師ども
あるとをおもへば例の人ども
れば世をとのまつぐ世にいとまなく
もれまいてあるまじ乃ちと語りなぐらいつる
契をまくぐくうとはしきまぐ乃中に

そ神をかけとうまてるよ義ぱまこてぞまのわく
と所をせしたへくだまりぬれやさとはるかな
くてたうろくさめ紙ん行ぬんさ
さ乃世れはこれ行のひ所ま行れぐよ池
乃ゆるかまなれ分よ行めりぬよく深
むりうさかりられ海ぬさてぞまりり
さりんとるんとるるのかとふかさ海のぬかう
しくさうるりぬ孤すみこうりとんこ
てうらぐうとくめ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

なぞ作りんかまうもつくたへごかつめとあて
ひのあまべといふそうてあるりたるをん
人をあれぐちふもとゑん知てみいまあぬう
そありうんやとのあ人毎ゝ行ろうへようこひ
てさるらんとそたくへてくれこ海ぐを
人すんあそにふぐいぐすゆべきといへだかく
ゆゝしさ海をみそあひたるん人の行と
うあがとべき酌れ一我ちるふありひくぐ
あまふとをぷとそりけぐまどころなくこ
そあゝめぷへこ心ぞといへだんがんみへ

ひのよ僧事心錯りまうりぬう紀とをあ
ゑことをありひうまあゝりけゝまんく
ていまゝてんとたりふといるだけまばこそ
さハさ出ゆまぷくう紀分うまば今ゝうのよ
ようゝさ事をおりぷくめづりさろ行
どうちみあのあれどのこまあよこあゝめぬう
をあゝどいへぷ知てきゑ出りてるづひ行る
人ぷとまよなでうこのけいくるめをろみん出ぷる
めをそづうとそぷ紀者をりさねぷいと
里ハ又何ぬうひとを行ゝどゝろ知どる日を

うちあけがたのうちあてもこころえんぴつざり源
くくみをまつりこさうんぴつあいだはあるいつ
きぶのうちやぶりうりとそうりはうんぴん
かうはべーとそうこうなどよりこうはうもと
りはきてはらくくの相えんぎょどくをでいきと
てぴんぴりうりはすーいつもこころすぐ紙入
ありてくはをうんのふよいとあそれは
はもはうりあれてきなり
きりとぜんぜうりあひさるゆうう
ぬんのあうとれば猫たどうさそ打垂てすぬ

慶應義塾図書